

第5回検討会議における主な意見

意見	事務局の考え方
なかよしキャンプなど、異校種間の連携・交流の考え方に、特別支援学校も含まれているのか。	野外教育事業の一環として実施している林間学校において、障がいのある子も一緒に参加するという取組はある。 なかよしキャンプは、H24からモデル的に実施しており、H24は2校、H25は4校と少しずつ拡大している。
「札幌らしい特色ある学校教育」の「雪」で、スキー授業だけではなく、スケートなど他のウインタースポーツも取り組むという考え方はあるか。	札幌の冬を象徴する言葉として「雪」になったが、当然ウインタースポーツ全般についてを踏まえている。 藤野地区ではボブスレーが行われていたり、最近できた月寒体育館横のカーリング場の活用を進めている学校もあったりする。
基礎学力の向上と、札幌市が広い概念でとらえている「学ぶ力」の区別をわかりやすくしてほしい。	新学習指導要領では、学力の重要な3つの要素として、「基礎的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習に取り組む意欲」としており、札幌市が考える「学んだ力」「活用する力」「学ぼうとする力」はこれに準じており、これら3つの要素をバランスよく育てていきたい。
家庭教育から始まり、幼・小・中・高・大までの連動性のある学びが薄いとを感じるが、まずは教育の出発点である幼児教育において家庭教育と連携をとっていくべき。	校種間の連動性ということでは、幼保小連携協議会で、小学校区にある近隣の幼稚園・保育園、小学校が集まり、顔合わせを含めた交流を通じて、校種間の敷居が低くなり、人間関係が構築されつつある。
学校は子どもたちに社会を感じさせるミニ社会、疑似体験の場であり、しっかり生かしていくとよいのでは。	教育委員会として、各学校の優れた実践などをホームページなどで紹介している。
積極的にさまざまな取組を行っている学校がある一方、あまりしていない学校もあり、教育委員会から何か働きかけは必要ではないか。	
地域が学校のために何かをするとか、学校が一方向的に期待するのでは長続きしない。お互いにやりがいや喜びなどを感じられる関係をつくる必要がある。	
中学校では「地域の達人」として「おやじの会」が一日講師など、学校といろいろな活動を行っている。	総合的な学習で地域の方がゲストティーチャーを行ったり、授業で校区の身近なところに出かけていく、花壇整備、部活生徒との交流試合など、地域とのつながりをつくる流れにはなっている。
札幌でコミュニティスクールの事例はあるか。	大通高校で、現在文部科学省のコミュニティスクール研究委託事業として行って2年目となる。 また、生涯学習の観点で、学校と地域の連携事業をH11から行って、60校あまりの取組がされているが、H25でいったん区切るところ。 学校地域支援本部事業をH21-22に北栄中で行ったこともある。 課題の一つとして、地域と学校をつなぐコーディネーターが必要と考えている。
学校、家庭、地域が固定化してしまっていて、もっと実践的にそれぞれが結び付いていくような考え方が大事。	
職業体験などは基礎学力のうえで行うことであり、まずは、自ら学びを実感できる、あるいは学ぼうとする力をどうつけているかという視点が弱いのではないか。	子どもたちに基礎力をつけていきたいというのが基本にあるが、全体像としては、全国学力・学習状況調査からは、札幌は概ね平均的な状況で、特に、「活用する力」「学ぼうとする力」に課題があるというのとらえている。 どのように基礎的な力をこれからも継続的につけていくのかを意識しつつ、課題となっている力をどうつけていくのかが今後5年間の大きなテーマと考えている。
子どもがきちんと勉強する環境にない家庭が増えており、親の「意識」をどう育てるかというテーマの一つ。今の子どもをどうやって将来の親にしていくかが大事。	
落ちこぼれを減らす、自立できない人をどうサポートするか、という視点が弱いのではないか。	
教員の社会的ステータスを高め、優秀で情熱のある人が教員になりたい、という社会の仕組みを作るべき。	
教員の資質向上をさらに高める施策を行っていかなくてはならないのではないか。	教員間の学び合い、異校種間の理解促進を図る研修、企業等への長期研修などさまざまな工夫を凝らしていきたい。